

石橋英明駄文集成

LOL (ろる)

オリンピックについて考える

今日、止められるか止められないのかの瀬戸際のタイミングで水道料金を支払った。これでもうやく胸を張って堂々と風呂に入ることが出来る。そう思ったのもつかの間、今度はガス代の請求書が届いた。これは一体どういうことなのだろうか。電気代やら電話代やら家賃やら、気がつけば毎月のように請求されているような気がする。きつとなめられているのだ。それもこれも私がオリンピックに出たことが無いからだ。

ここで正直に告白すると、私は三十を近くにして、恥ずかしながら未だにオリンピックに出場した事が一度もない。これではなめられてあたり前だろう。オリンピックに出たことの無い奴なんか、ちょっと脅せば家賃も光熱費も支払うに違いないと思われ、不当に搾取され続けるのだ。このままではいけない。私もオリンピックを目指す事にした。たった今！！

オリンピックを目指すからには生半可な覚悟ではいけない。体を鍛え、アスリートとしての肉体を手に入れなければならない。そのためにはバイトなんかしている場合ではない。そんな事している暇があったら、二度寝かなんかして来るべき戦いの日々にそんなえて体力を蓄えなくてはならない。あとスタミナつけるために夕食は毎日ステーキにする必要があるだろう。夕食後はビールを飲みながらニコニコ動画で面白MADを見、精神を充実させるのだ。そんな過酷な日々に私は耐えられるのだろうか！？ いや、耐えなければならない。私は人よりスポーツが苦手である。そんな私がオリンピックに出るために人以上の努力をせずして何をしよう？ 風呂場の掃除でもするか？ いや、そんな場合ではないのだ！！

私は今覚悟を決めた。これから先は修羅の道だ。「これから先は修羅の道だ！」実際に口に出して言ってみた。隣の住人から壁を叩かれた。それほどこの部屋は壁が薄いのだ。そんな不自由な生活もオリンピックに出るまでの辛抱だ！！

一つだけ不安があるとすれば、私がいまいちオリンピックとか言うものを理解していない点にある。うっすらとスポーツが得意な人が集まってモキュモキュするくらいのイメージを持っている。あと谷選手。最低でも逆上がりくらいはマスターしておくべきだろう。よし、忙しくなってきた。

あとはこの話を役所に通して、国から補助金を貰うだけだ。いくら不況とはいえ、未来のアスリートを育てるのに必要なお金を出し渋るような事はしないだろう。補助金を貰ったら何をしよう。そうだ！補助金でガス代を払おう！！ そのくらいの自由はあっていいはずだ。

そんなわけで、是非次のオリンピックには期待していて欲しい。

洗濯し、洗濯物を干し、それを取り込み、たたみ、収納する。それら全ての工程を終えてたとしても、数日後には、また洗濯をしなければならない。延々と終わることのない苦行。まるで賽の河原ではないか。

人はどうして洗濯をするのであろう。まあ、それは衣服が汚れるからであるが、ならばなぜ、洗濯という重い十字架を背負ってまで人は衣服を着るのか。本当に衣服は必要なのだろうか？

では、アナタがスッポンポンで往来を行けばいい。人はそう言うかもしれない。だが、それは出来ない。怒られるからだ。何の因果か、今の社会では、スッポンポンで往来を行くと怒られるという仕組みになっている。

だから仕方なく服を着ている。そういう人も多いのではないかと思う。その結果、待ち受けているのが洗濯という終わらないディステニーである。なんということであろう。省エネが求められる現代において、これはあまりにもあれではないか。

想像してほしい。誰もが生まれたままの姿で歩き回っている世界を。そこにはお洒落さんもダサイ人もいない。変な英文が書かれたTシャツも、変な漢字が書かれたTシャツもない。洗濯から解放された人々は朗らかで、堂々とチンチンブラブラ、マンマンモジャモジャしている。差別も紛争もなく、ポロリもなければパンチラもない。

いや、ちょっと待って、パンチラは、パンチラだけは、なんとか残してやってくれないだろうか？ 僕はいいのだ、別にパンチラなどなくても。だが、パンチラがなくなると悲しむ人々は確実にいる。だから、その・・・せめてパンツとスカートだけでも穿いてはくれぬだろうか。いや、もっと言えばちゃんと衣服を着て欲しい。その方が、何かこう、色々と中身を想像できて良いではないか！！

そうして、衣服を着るということはつまり、洗濯をしなければならないということである。洗濯をすることによって、パンチラという素晴らしいコンテンツが守られているのである。よし、洗濯をしよう。そうして、明日のロマンを守ろうではないか！！

そんなことを、洗濯する前にいつも考える。そうこうする内に日が暮れていて、今日も洗濯するタイミングを失うのだ。

トータルフットボールの発展と日本的パスサッカーの歴史について

私は、自らの半生をフットボールへの貢献に費やしてきたと自負している。若い時は暇さえあればフットボールだったし、三十になった今でもほぼ毎日フットボールである。土日や祝日は3回くらいフットボールの日もあるので、同年代の人と比べたらかなりのフットボーラーと言っても良いかも知れない。

もはやフットボーラーなどという比較級ではなく、フットボーレスト・イン・マイ・ファミリー(※家族の中で最もフットボールである)すなわち最上級と言ってもいいんじゃないだろうか。

バーレーンであんなことになり、惜しまれつつ代表を引退した後も、私はこの国のフットボールの発展のために力を尽くしてきた。その証拠に昨日も頑張りすぎて指が攣りそうになった。なので今日は軽めのフットボールにしようと思う。

そんな私だからこそ見える部分がある。それはすなわち、この国のフットボールに足りない部分であり、その足りない部分さえ補えば、もうフットボール最強、霊長類ヒト科フットボーラー部門審査員特別賞も夢じゃないわけである。いわんや参加賞をやである。

では、その足りない部分とは何か？ それを説明する前にこの国におけるフットボールの歴史について説明せねばなるまい。

【むかし、むかし、ある所にお爺さんとお婆さんがいました。ある日お爺さんは山へ芝刈りに、お婆さんは川へ洗濯に行きました。お婆さんが川で洗濯をしていると、川上からある一人のフットボーラーが流れてきました。お爺さんとお婆さんは、そのフットボーラーに『キング・カズ』と名前を付けました・・・】

こんな話を誰もが耳にしたことがあるだろう。この国におけるフットボールの起源として広く知られる逸話である。だがそれより前にフットボールは確かにあった。その証拠にこんな話がある。

【むかし男ありけり。野山に交じりて竹を取りつつよろずの事に使ひけり・・・】

このよろずの事とは言わずもがなフットボールの事であろう。では、そもそもフットボールとはなんなのか・・・私はこの文章で何度も何度もフットボールと言っているが、本当にフットボールこのことが分かっているのか！？ そう思われる方もいるだろう。なので、私自身、フットボールを今一度確認するために実際にフットボールってみた。

結果、スッキリした。なんだか全部どうでもよくなってきた。十代の頃はこんな事無かったのに、年はとりたくないものである。

全てのフットボーラーに幸あれ

夏の思い出

安全ピンというから安全なのだと思ったら指を刺して痛かった。ここにも安全なんて無かった。なんというデンジャラスな世界だ。男は外に出たら確か7、8人くらいの敵がいると思えみたいな言葉があった気がするが、これでは7、8人どころの騒ぎではないだろう。男の世界とは、このようにベリーハードモードなのだ。

でも僕はベリーイージーモードがいい。もっとフワフワとした、マシュマロみたいな世界を生きたい。女性専用車両の中に僕一人混ざって、でも怒られない、むしろ褒められる。そんなシュガーな人生を送りたい。世の中とは、社会とは甘いものではないと人は言う。でも甘くたっていいじゃないか。みんながみんな辛党だとは限らないじゃない。甘党の人のことも考えてよ。それが本当のバリアフリーじゃないかしら。私なにか間違ってます？

例えばバイトに遅刻するでしょう。その時に怒られるんじゃないかと、ニッコリ笑って、「あら、もっと遅くってもよかったのに。なんならずっと来なくてもよかったのに」と言われたらどうでしょう。友人と食事をして財布を忘れた。詰られるじゃなしに「そんなことだろうと思ったよ。あ、ここは僕が払うから気にしないでいいよ。お金返さなくてもいいから、二度と僕の前に顔を出さないでね」と言われたらどうでしょう。人の足を踏んづけてしまい謝った時に「いいよいいよ。謝らなくて。謝ってもどうせ一生許さないから謝るなんて無駄なことしないでいいよ」と言われたらどうでしょう。多分泣くと思います。そんなこと言われるくらいなら、安全ピンで指の先を2、3回チクってやる方がいい。7、8人くらいの敵と戦い、ベリーハードな世界に身をさらした方が百万倍ましだ。

とまあ、こんな風にあえて危険な道に行く僕ですが、こんな僕にも子供時代はありまして、夏休みはいろんなところに連れて行ってもらったりしました。朝の十時くらいからテレビで『じゃりん子ちえ』が再放送やってて、それをみる度に夏を噛み締めていたものです。

学生の頃、サークルの先輩達と意思つきで江ノ島に行って花火をしたりして遊んだりして、それも私の夏の思い出の一つであります。

働きたくない。働いたら負けだと思っている。でも実際は働かないと色々な意味で負けてしまうので仕方なく働いている。こんな人は多いのではないだろうか。この怠け者めが。実を言うと私もわりとイヤイヤ働いているクチである。労働が辛い訳ではない。今の職場には満足している。ただ、働いているよりも綺麗な女性のオッパイを揉んだり美味しいラーメンなんかを食べている事の方がずっとずっと好きなのだ。人間生きている時間は限られている。楽しくない仕事をすよりも、楽しい事だけして生きていこうじゃないか。

だが、ここに一つ問題がある。皆が人生を謳歌しようとして一切の仕事を放棄したら、誰が私に美味しいラーメンを作ってくれるのだろうか。誰が私にオッパイを揉ませてくれるのだろうか。美味しいラーメンはチキンラーメンかなんかで我慢するとして、問題はオッパイだ。私がオッパイを揉めるのは、私にオッパイを揉ませるとい仕事に従事している人がいるからオッパイを揉めるのだ。はっきり言おう。私は金銭を介さなければオッパイを揉む事が出来ないのだ。石橋英明とは、そういう男なのだ。

だから私は働くのだ。労働で大事なものはギブアンドテイクで言えばギブではない。テイクなのだ。私は何をテイク出来るか、それが重要なのだ。オッパイをもませてくれる綺麗な女性はオッパイというテイクを与えてくれる。私はそれにたいして金銭というギブを与える。そうして経済は回っている。かつて外国の学者が言っらしいのだが、「神の見えざる手」というのがあるらしいのだ。私も修行の果てに、いつしかその「神の見えざる手」を習得し、一段階上のプレイをプレイできるかも知れない。(ここで「プレイ」と聞いて卑猥な想像したものは人間性が卑猥なのだ。もちろん私は卑猥な意味で「プレイ」という言葉を使った。私は卑猥な人間だからだ。だがそれがどうした。はっきり言おう。石橋英明とはそういう人間なのだ。)

そういうわけで、話をまとめよう。私はこの文章を書くに当たって缶ビールを1リットル程飲んだ。今フワフワしていて超気持ち良い。その結果書きあがった文章がこれである。これから数本文章を書く気である。それらが読者諸君の目に届くかどうかは現時点で分からないが、私は今大事な事を一つ学んだ気がする。仕事って言うのは、少なくとも酒を飲みながらするものではない。世の中にはお酒を飲むのがお仕事っていう人もいるが、そういう人に私は一言言いたい。お疲れ様です。お体にはお気をつけて。

意外にいい文章っぽくまとまったので私は驚いている。では。

今、時代が大きく変わろうとしている。その風を、うねりを、私はギョングン感じている。駅前のファミマがつぶれてセブンになったり、セブンがつぶれてファミマになったり、時代は大きく変わっているのだ。少なくとも百年単位でみると、百年とかなり前まで、人はちょん髷をしていた。今、私がちょん髷をしてバイトに行ったらきっと怒られる。それくらい激しく時代は動いているのだ。

時代だけではない。小さい子供もよく動く。先日、駐車場でのアルバイトの時、4・5歳くらいの可愛らしい女の子が父親の股間にタッチしながら「フォー♪フォー♪」とはしゃぎ、怒られていた。それくらい激しく、小さい子供は動いているのだ。

しかしかわらない物もある。動かないものもある。色即是空、諸行無常、かわらぬもののあるべきか、などと人は言うかも知れないが、確にかわらないものがある。それは何か？ 気になった人はご自身で調べてみるがよい。私は今良い例えが思い浮かばなかったが、きっと何かあるに違いない。あるといいよね。きっとあるさ。うん大丈夫。だってお前生きてんじゃん。

かわらないものって言えば、私が購読している漫画雑誌が創刊30年とか言っていた。30年ってすごいよね。その時に生まれた子はもう三十になっているのかと思うととても感慨深い。感慨深いと同時に、私はその雑誌を講読しだして4・5年くらいしか経ってないので、自分とは全く関係の無い気もしないではない。でもあれだ、赤ちゃんが三十歳のおっさんになるように、時代は激しく変わっているのだ。その風を、そのうねりを、私はギョングン感じている。駅前のファミマがつぶれてセブンになったり、セブンがつぶれてファミマになったり、時代は大きく変わっているのだ。少なくとも百年単位でみると、百年とかなり前まで、人はちょん髷をしていた。今、私がちょん髷をしてバイトに行ったらきっと怒られる。それくらい激しく時代は動いているのだ。

時代だけではない。小さい子供もよく動く。先日、駐車場でのアルバイトの時、4・5歳くらいの可愛らしい女の子が父親の股間にタッチしながら「フォー♪フォー♪」とはしゃぎ、怒られていた。それくらい激しく、小さい子供は動いているのだ。

しかしかわらない物もある。動かないものもある。色即是空、諸行無常、かわらぬもののあるべきか、などと人は言うかも知れない。あと人はこんな事も言うだろう。無限ループって怖いよね。ビールうまい。

最近、カタカナ言葉が氾濫している。実に結構な事である。

例えば、「性的嫌がらせ」という言葉、いかにも脂ぎっていて不快極まりない印象をうける。だが、それを「セクシャル・ハラスメント」という言葉に置き換えてみよう。なんともスリリングな感じがするではないか。「家庭内暴力」という言葉、どこにも出口が無い悲惨な状況が目につく。「ドメスティック・バイオレンス」・・・まるでヒーローの必殺技のようではないか。「喰らえ！俺のドメスティック・バイオレンス！！！」みたいなね。

だが、そこに落とし穴があるのである。よく考えて欲しい。「セクシャル・ハラスメント」も「ドメスティック・バイオレンス」も、やってはイケナイ事である。それをカタカナ言葉のお洒落な雰囲気に乗っかって、危うく奨励しそうになったのではないか。

確かにカタカナ言葉はお洒落だ。カッコいい。だが、見た目のお洒落さに、危険な本質が隠されている事もある。もう一度、言葉というこの得体の知れぬ化け物に真摯に向き合おうではないか。

「不況に喘ぐ日本」という表現を目にした事があると思う。この言葉の「喘ぐ」という所に着目して欲しい。何かコスモを感じないか？

「荒波にもまれる」・・・あらなみに「もまれる」のだ。どうだろう？心なしか股間がオギオギしてこないか？

そう、言葉には無限の可能性が、未知の力が宿っているのだ。何もカタカナ言葉を使ってお洒落ぶらなくてもいいのだ。胸を張って堂々と、言葉の力を信じようではないか。胸を張るのだ。なんなら尻でもいい。つまりはそういう事なのだ。

世界はめまぐるしく動き、次から次へ新しい言葉が生まれては消えていく。大事な事は目先の新しさに飛びつく事ではなく、どっしりしっかり構えて受け止めていく事ではないだろうか。心配しなくても言葉は常にそばにあり、我々を支えてくれているものなのだから。

思い出モンテスキュー

それは私がブルックリンで教鞭をとっていた頃の話だから、10年ほど前のことだと思う。生徒に一人とても面白い子がいて、その子は度々面白いことを言ってクラスのみんを笑わせていて、とても面白かった。金髪だか茶髪だか黒髪が印象的な男子か女子で、名前はたしかキャサリンだかミザリーだかトムだかマイケルだかそんな感じの名前だった。というか正直外国の人の区別がいまいちつかん。みんな同じように見える。そんな訳でブルックリン時代の思い出は今でも私の胸の奥深くに刻まれたかけがえのない思い出の一ページとしてかけがえのない感じで刻まれてある。みんな元気だろうか。そして、今の私の姿を見たらなんと言うだろうか？ 英語でなんか言うだろうか？ 英語でなんか言われても正直よく分からなくてリアクションに困るのだが、まあ、何か言うだろうね。

人に歴史あり、という。食は中華にあり、とも言う。意外な人に意外な歴史があったり、しょうもない奴だと思ったけれど話してみたらやっぱりしょうもない人生を送っていて逆にビックリしたりするだろう。実際、私がブルックリンで教鞭をとっていたことはごく親しい友人にも話したことなかったし、話したらさぞ驚かれることだと思う。実際、自分でもそんな過去があったなんて驚いているところだ。人生で一番、いや、今週で一番の驚きだといえなくもない。人は色々な人と出会って色々な経験をつみ、成長していく。それはまるで真っ白なキャンパスに色々な色が重ねられ、やがて一つの絵画となっていくのにも似ている。あ、ちなみにここで言う「色」っていうのは、人とか経験とかそんなモノの例えであって、出来上がった絵画が、なんていうか自分？ みたいなそんな例えなんだけど難しかったね。ごめんごめん。分かりやすくポケモンで例えると、ポケモンいっぱいいるじゃん。よく知らないけど、そのポケモンを沢山ゲットしてポケモンマスターっていうの？ そういうのになっていくのかな？まあ、そんな感じである。

ブルックリン時代を思い出して、少々説教臭くなってしまってますまない。ただ、一つ一つの出会いを大事に生きて欲しい。私の言いたいことはそれだけである。瞬間瞬間が人生なのである。先ほど、真っ暗な風呂に入ったのも人生の一ページなのだ。そう、私のうちは昨日風呂場の電球が切れたのだ。電球を買いなおさなければ風呂場は暗いままである。もう、まじくソファック。

私のプライベート

悪いけど私セレブですから、朝食は毎日クロワッサンとコーヒーですの。英字新聞読みながらね。それから熱いシャワーを浴びて、バスローブを羽織って、英字新聞を読みますの。

英字新聞ではアレですの。コボちゃん一家が、みんな金髪ですの。犬がシェパードですの。猫がヒマラヤンですの。四コマ目で大体誰かが「オーマイガー！」って言ってますの。だって英字新聞ですものね。

通勤電車はセレブ専用車両ですの。新宿渋谷間で3万円くらいしますの。まあ、お得ですわね。オフィスに着くと、秘書が注いでくれたコーヒーを飲みながら、英字新聞読みますの。

ランチはいつものオープンカフェですの。アブラマシマシ・ヤサイオオメの大豚ですの。もちろん、英字新聞読みながらよ。英字新聞では、阪神タイガースが勝つと、「マジック130点灯！！」とか無茶なこと言い出しますの。毎年のことですの。

アフターファイブは優雅に銀座をプラプラしますの。銀座・マツヤで牛丼大盛りですの。セレブですもの。もちろん味噌汁はトン汁に変更しますわよ。

それから吐くまで飲みますの。ホッピーを「中」だけお変わりし続けながら、吐くまで飲みますの。

そして帰って熱いシャワーを浴びて、バスローブに身を包み、英字新聞ですの。あと、セレブですもの。ジャンプもマガジンも、ほとんど英字ですの。セレブですもの。仕方ないですわね。でもセレブですから、ジャンプは毎週日曜には新しいの読めますのよ。

土日は、昼間で寝てますの。そして、昼真っから焼酎水割りを飲みますの。つまみはイカの塩辛ですの。それから吐くまで飲みますの。
毎日吐くまで飲みますの。

天は自ら助くモノを助く。という。ならば、自ら慰むモノを慰むことはあるのだろうか？ 自ら慰むこと三十年、信頼と実績の石橋こと私に言わせてもらえれば、天はとりあえず今のところはスルーらしい。

迷える時、困難に直面した時、私は時々、祈り念ずることがある。「天よ、願わくば私の部屋を掃除したまえ」「願わくば我に金麦を買ってきたまえ・・・」と。それらの祈りも、今のところスルーされている。

天は、汝の隣人を愛せよ。という。私の隣の部屋には家族ずれが住んでいて、休みの日などは、外で遊んでいる子供たちと出くわしたりする。いくらなんでも彼女らを愛してしまうと社会的にまずいので、私はこの言葉に関してはスルーすることになっている。

また、右の頬をぶたれたら左の頬を差し出せ。とも言う。だが、育ちの良い品行方正の私は生まれてこの方ぶたれることなど、たまにしかないのでこの言葉に関しても基本はスルーである。ただ、それが何らかのプレイであった場合においては、その限りではない。

こんな風に、基本、私と天はお互いスルーしたりされたり、微妙な距離を保ちつつ良い関係を築いている。スープの冷めない距離とでも言おうか。

持ちつ持たれず、ではなく、持たず持たれられず。ウィン・ウィンというか、ルーズルーズの関係。そういう具合に、私たちは良い関係を保っている。

あとさ、「オーメン」って、「アーメン」と何か関係あるんかね？ 今、ふとそう思いついた。

情報化社会と呼ばれている。新聞やテレビ、インターネットなど、我々はいまだかつて無いほどの膨大な量の情報に日々接している。その事を自覚・自認している人は多い。だが、その膨大な量の情報に飲まれ、その渦の中で溺れている事に気がついていない人はどれほどいるだろうか？私はそういう人を集めて、フットサルをしたい。

私は中学の時サッカー部だった。3年間ベンチを暖めるという重要な役職についていた。高校の時、演劇部だった。なぜかよくサッカーをした。それが大学の為上京し、中退してフリーターとして食っている今、あまりサッカーをしなくなった。だから今ふと思ったのだ。フットサルをしたいなど。

野球は苦手である。あんな小さいボールに細いバットを当てるなんて人間業じゃないと思う。その点サッカーボールは、野球のボールに比べて大きい。あと、飛んでくる玉をバットで打ち返すなんていうアクロバティックな芸当をする必要も無い。地面に転がっているボールを蹴ればいいのだ。とは言ってもサッカーが特別得意というわけではもちろん無い。私は、スポーツが苦手なのだ。

スポーツマンというと爽やかなイメージがあるだろう。私はそれに異を唱えたい。スポーツをやっている人の中にも色んな人がいる。乱暴な人もいるし怒りっぽい人もいる。確かに、爽やかな人もいるだろう。だが、スポーツマンに限ったことではなく、セールスマンにだって爽やかな人はいるに違いない。なのに何故スポーツマンが爽やかなイメージを持たれているのか、それこそが、この情報化社会において、人々が情報の津波にもまれてアップアップアポーンしていることの証拠では無いだろうか。証拠では無いだろう。だが、私の言いたいことを分かってほしい。魂で、ソウルで！

最後になるが、私はスポーツマンの事を悪く言う気はぜんぜん無い。ただ、スポーツをしていないメタボさんのことも少しは気にかけて欲しいと言っているのだ。愛してくれとは言わない。だが、石持て追いかけるような事はなしにしていただきたいし、もっと言うならオッパイを揉ませていただきたい。

ノーオッパイ・ノーライフ

きっと天国のジョンレノンも、こう言っているはずさ。

食についての考察

肉はうまい。生まれてきてからこのかたモヤシしか食したことのない諸君にはこんな事を言っても信じてもらえぬかもしれないが、肉はうまいのである。嘘だと思うなら一度食うてみるがよい。豚肉も牛肉も鶏肉も魚肉も皆うまい。だが最近気がついたことがある。お野菜も意外とうまい。というか、切ったお野菜に味のついた汁をかけた一皿は結構うまい。人はそれをサラダという。味のついた汁を、ドレッシングという。

人は長い時間をかけ、文明を発展させてきた。一人一人の時間は限られている。その限られた時間の中で精一杯つくし、そこで培ったものを次の世代の人に渡し、そうやって少しずつ少しずつ前に進んで来た。その結果がサラダであり、ドレッシングなのだろう。野に生えているのを引っこ抜いただけの土のついた大根では、こうも私を感動させる事は無かったであろう。

サラダだけでは無い。納豆も、カレーライスも、クリームシチューだってそうである。カレーを作っているときに「ここでカレーのルーを入れるんじゃなしに、クリームシチューのルーを入れたら美味しいクリームシチューが出来るんじゃないだろうか？」そんな思いつきの一つ一つが、色々な料理なりお菓子なりを生んで来たのだ。人間ってすごい。人間ってすばらしい。人間まじネ申。もしもこの世に人間がいなかったら、私は肉はおろか、モヤシも食えなかったことであろう。西友の、一パック数十円の、すぐに腐ってしまう、そのモヤシすらも、食えなかったであろう。

わたしはこの稿で食について語る気でいた。だが食について語っているつもりが、いつしか人間賛歌へととなっていた。まさにこれを奇跡と言わずしてなんと言おう。奇跡と言わずして、偶然と言おうではないか！！

それから寿司もうまい。私は回転すし屋に行くたびに思うのだが、あれって回転している意味があるのだろうか。ずっと食べられずにグルグル回っているお寿司が可哀想になって、言い換えれば、何週も何週もずっと手つかずのまま回っているお寿司が可哀想になって、僕は「ああ、あの誰からも食べてもらえないおすしが可哀想だな」って思うのだ。

諸君、こんな心優しい私をどう思うかね。

【少しぐらいはみだしたっていいさ oh oh 夢を描こう】(※Mr.Children 『Tomorrow never knows』より)

中学生時代、私はMr.Childrenというバンドに夢中になり、その楽曲を毎日のように聞いていた。その頃といえば、ちょうどブリーフタイプのパンツからトランクスタイプのパンツへの過渡期であり、恐る恐るトランクという大人への階段へ足を踏み出そうとしていた。

トランクスを穿くようになった私は、すぐにある問題に直面した。体育の時間、短パンの裾からはみ出してしまうのである。今なら「はっはっは すいません。私のジャジャ丸がついポロリしてしまいました。いやぁ困ったものですな。なんならどうです？お姉さんのピッコロちゃんもポロリしてみてもは・・・」などと紳士的な態度をとり、お巡りさんにこっ酷く叱られた拳句、社会的に死んでしまうくらいで済むのだが、思春期の私にはそれが耐えられず、トランクスの下にブリーフを穿くという、今にして思えば珍妙なパンツスタイルをとったのである。

そう、大好きなミスチルが
「少しぐらいはみだしたっていいさ」
と言ってくれているのにも関わらずである。

今にして思えば、私は歌詞の意味を、その魂に触れずに上辺だけを触って喜んでいたのでらう。そのクセ色々分かった気になり、世界中で自分が一番頭が良いような気になり、高一になると、「いや、あのエヴァの映画の意味するところはね・・・」などと語ったりするのである。もう、あの頃の自分死ねばいいのに。あの頃の地球滅びればいいのに！！

では、思春期に得たものは意味は無いのだろうか・・・私にはそうは思えない。本質に触れていようがいまいが、その頃の私を形つくっていったのは確かだし、また、大人になってから気がつくこともある。

だから今問題なのは中学時代に聞いていた歌の意味ではなく、「少しぐらいはみだしたっていい」とは言いながら、さすがにそれははみ出しすぎ。はみ出すとかじゃなくて、ほぼ全部出してしまった事であり、だから私は今こうしてお巡りさんに怒られているのである。

やれやれ、まさかこんな事になるなんてね。まさに `Tomorrow never knows、一寸先は闇って奴だね。トホホ

宣言

私は不言実行と言う言葉が嫌いだ。言わないうちに実行されて、それがさも計画通りですって顔されても、そんなの言わないんだから分からないし、分からないから後でなんとでも言い放題じゃないか。黙って飯食って、黙って風呂入って、黙って寝る。まるで倦怠期夫婦の旦那の如しである。

では、有言実行はどうだろうか。私は風呂に入ると言った。確かに言った。だから風呂に入らねばならぬ。なぜだ。だってそう言ったじゃん。それが有言実行ということである。一度風呂に入るといったからにはそれは必ず行動として成果として実現されなければならない。金曜ロードショーでトトロがやっぺいようがルパンがやっぺいようが揺るがないのである。だが、と私は思う。かつての自分が発した言葉だからと言って、必ずしもそれに縛られるのは果たしていい事なのだろうか。縛られるよりは縛りたい。縛られる事への興味もないこともないが、7：3か8：2の割合で縛られるよりは縛りたい。そんな私でいたいから、有言実行も正しい態度とは言えないだろう。

ならば有言不行はどうだろう。言うまでもない。ただの嘘つき野郎に成り下がるだけである。たしか昔ある詩人がこう言っていた。「라이어라이어もう信じられないやー」それくらい、嘘はいけない事であり、だから有言不行などとはとんでもない事である。

じゃあどうすればいいのさ。完全に詰んでるじゃん。そう思うのはまだ早い。ここであえて、不言不行を提唱しようと思う。

不言不行とは何か・・・言わないし、行なわないのである。言わないから、嘘つき野郎のそそりを受けなくてすむ。何も言わず何も行なわず、一人心静かに暮らすのである。これこそが、この現代社会に疲れきった我々が救われる、ただひとつの態度なのではなからうか。今日から、今から、この瞬間から、不言不行でいこうではないか！！・・・と宣言した所で困った事になった。「不言不行」でいくと言っておいて「不言不行」をおこなうのは、「有言実行」にあたり、だから「不言不行」をなし得ていない、「有言不行」の嘘つき野郎になりはすまいか。この二重三重の言葉のスパイラルに縛られた私はこう思った。

縛られるのも、意外といいかもしれない。

これを二十代最後の、私の宣言とする。

ある日、俳人たる私はある詩のことで悩んでいた。

「泣きながら 祖父母の無礼に耐える孫」

「泣きながら 祖父母の無礼を詫びる孫」

「耐える」と「詫びる」どちらを採用しようか。

前者の詩は、ポニーテールの小学六年生の女の子(最近ブラジャーデビューを果たした)が、無礼な祖父母の仕打ちに、唇を噛み締めて耐え忍んでいる様子が思い起こされ、実にオギオギする。

後者は、メガネでツインテールの小学六年生の女の子(友達が次々とブラジャーデビューを果たし、密かに自分の発育に悩んでいる)が、無礼な祖父母の後始末をするために雨の中ずぶ濡れになりながら近所を謝罪して回る状況が浮かび上がり、真にオギオギする。

その話を友人にしたところ、彼は「それはハゲーム差で『詫びる』がよい」と即答した。理由を聞くと「メガネでツインテールの小学六年生女子とかマジ最高やん」と応えた。その瞬間、私と彼は唯一無二の親友になった。三ヵ月後、その親友は逮捕された。

この事から、詩歌や文章などを推敲する事を「耐詫」と言うようになったのはあまりにも有名だろう。皆は、文章を書くとき、文章などと大仰なものでなくても、メールなどを打つ際にちゃんと耐詫をしているだろうか。面倒くさくても、ちゃんと耐詫をしないといけない。しないと無茶苦茶になってしまう。そう、今アナタが読んでいるこの文章のようにね☆

俺は過去を振り返らないぜヒッハー！ 俺は汚い大人になんてならないぜヒッハー！ などと、人生を一切「耐詫」することなく、今まで生きてきた。そして三十年、気がつけば世界のほぼ全てを手に入れていた。唯一手に入れていないものがあるとすれば、栃木県くらいだ。だがそれも時間の問題だろう。だがどうしてだろう、この空しさは。ありとあらゆるモノを手中に収めながら感じるこの心の中にポッカリ穴が開いてそこを私鉄が走り抜けていく感じ。これが恋なのだろうか？ それとも風邪かな？ いや、違う。それはきっと私の人生において「耐詫」が決定的に欠如していたからだ。だから私は伝えたい。「耐詫」の大事さを。そして伝えた。今ここに伝わった。今私は大事な事をアナタに伝えた。いやいや、お礼なんていらぬ。人としてあたり前のことをしただけだ。それでもどうしてもお礼がしたいというのであれば、3,000円くらい下さい。そしたら年が越せますけん。

「洋の東西を問わず云々・・・」という言葉がある。ここでいう「洋の東西」とは、言わずもがな「西洋」と「東洋」の事である。「北洋」と「南洋」では無い。何故だ。

このように、世の中には皆一様にそういうものとして諒解はしているけれど、よくよく考えるとよく分からない事がとても多い。まあ、よく考えるとそれなりに理由はあって調べたらすぐに分かる事なのかも知れないが、にもかかわらず多くの人が放っておいたままにしているのだ。理由は明白である。どうでもいいからだ。

実際どうして「西洋」と「東洋」であって「北洋」と「南洋」でないのかなど、これを今まさに書いている私、石橋英明にとっても至極どうでもいい話である。私でさえそうなのだから、この「どうでもいい度」は相当なものであろう。しかし、待っていただきたい。まさにその「どうでもいい」事こそが我々人類を人類たらしめている「文化」の中核なのではないだろうか。(この際だからはっきり言おう。根拠は何一つ無い。)

もし、この世界から「どうでもいい事」が何一つ無くなったら、世界は、我々の文明はどうなるだろうか。きっとすごい事になっているに違いない。でもすごくなにか無くたっていい。普通でいい。いや、むしろ普通がいい。だから、「どうでもいい事」はじつは「とっても大切な事」なのだ。

私は、おそらくこれからも色んな「どうでもいい事」を頭に思い浮かべることだろう。それがもし、酒の席なんか立った場合は思いつくままに「どうでもいい事」を口走るだろう。だが真剣に調べたりはしないだろう。理由は明白である。どうでもいいからだ。

このどうでもいい事にあふれたかけがえの無い世界を、私は愛し続けていこうと思う。

文学についての考察

「トンネルを抜けるとそこは雪国だった」

「我輩はネコである。名前はまだない」

「メロスは激怒した」

・
・
・

実に名文である。他にも世に名文の類は何百とあり、その一個一個を書き並べてもしょうがないのでこれくらいに留めておくが、これら名文を眺めていて一つ気がついた事がある。

どれも分かり易い文章なのだ。何を伝えようとしているのか、意味がはっきりくっきりしている。

それに比べて、例えば次の文章なんかどうだろう。

「太郎君は、300メートル離れた花子さんのうちへ、時速15キロの速さで移動して、午後3時15分に着きました。太郎君が出発したのは何時何分でしょう」

全く何を言っているのかさっぱり分からない。駄文中の駄文である。文学性の欠片もない。

こんな駄文ばかり読んでいると、存在自体が駄文そのものになり、愛の無いセックスをして子を授かり、それなりに幸せな老後を送るであろう。はたしてそれでいいのか？

まあ、それがいいのか悪いのかは人それぞれだし、僕なんかに言わせてもらえれば、愛があろうが無かろうがセックスをしている時点で勝ちだね。

自動車・『自ら動く車』と名乗っていながら実は名ばかりで、動くにはエンジンをかけ、ギアをドライブにし、後方を確認しつつアクセルを踏んで初めてやっと「ブーン」とか言って動き出す。最新のになると、その「ブーン」も言わなくなるらしい。元気だけがとり得だけだったバイトが長期休暇明け、すっかり無口になってしまうようなものである。全然『自ら動く車』でもなんでも無いではないか。自ら動くというからにはもっと自発的に動くべきではないか。少なくとも、茶の一杯でも入れるべきである。

自動車ばかりではない。掃除機と言いながら掃除をせず、洗濯機と言いながら洗濯をしない。言われて動くならまだ良い。だが掃除機にいくら「掃除しろ」と口で言っても言う事を聞かず、コードを伸ばしてコンセントに差込み、畳の目にそって優しく掃除機をかけなければ掃除機は掃除機として機能しない。

自動車も掃除機も洗濯機も、この私がワザワザ操作をしなければいけない。この私がである。これを野球で例えるなら、監督が送りバントのサインを出し、そして監督自ら良い感じにバントを決めるみたいなものだろう。これは一体どういうことだろう。これは文明社会の退廃ではないだろうか！！！！

いつの間にこんな世の中になったのだろうか。少なくとも三十年前は違った。私が何にもしなくても全部お母さんがやってくれた。

それがなぜ、一体何が間違えていたというのか。きっと政治が悪いに違いない。やれやれ・・・どうやら私自ら政権の場に躍り出て、この腐った世の中を変えなければいけないようだ。しょうがない。そろそろ本気を出す事にしよう。

その為には、まず選挙に出馬しなければならない。その上で選挙活動を行い、票を集め、選挙に勝たなければならない。出馬したからと言って毎日何もせずにパエリアとか食べながら過ごしては選挙に勝てないのだ。

選挙に勝って議員さんになってからはどうだろうか。政党に入ったり国会議事堂に行ったり、朝まで生テレビに出たりしなければいけない。これでは休日ダラダラ過ごす暇も平日仕事もしないで昼まで寝ている暇も恋をする暇もない。何より実に面倒くさい。

面倒くさいのはいやだ。これは私が怠け者だからではない。皆面倒くさいのは嫌なのだ。だから面倒くさい事を面倒くさくなくするために、自動車や掃除機や洗濯機が発明された。これが文明というものである。

という事は、きっとそのうち『全自動世直しマシーン』が発明され、全自動的にこの腐った文明社会は世直される事だろう。

うぱうぱぶうのぽんぴろちん。

戦国時代、人々は刀や弓矢なんかを使って戦争をしていた。刀で斬られたり、矢が刺さったりしたらさぞかし痛いだろう。とんでも無い事である。もしも人類全体で「痛みの総量」が決まっていたとしたら、おそらく戦国時代なんかで結構な量の痛みが消費された事であろう。そう考えると今こうして私が若干の痛苦を感じるだけで過ごしていけるのは、戦国時代のご先祖様達のおかげである。ありがたい。

そう考えると、私も生きているうちに痛みを消費し、未来の子供たちが感じたであろう苦痛を少しでも減らしてあげるべきなんじゃないかと思う。だが、それは大きな間違いである。

なんの痛みも苦しみも無い人生。果たしてそんなものが人生と言えるのであろうか。もし、私が生きた証として、まだ見ぬ子供たちにそんな空虚な人生しか与えてやれぬとしたら、それはどんなに悲しい事だろう。どんなにか悲しい事だろう。

だから私は子供達に、人生の痛みや苦しみをちゃんと感じてもらえるために、自分自身はなるべく痛みを感じぬよう、楽な方楽な方へ流されていこうと思う。それが私が未来に生きる子供たちのために出来る、精一杯の事だからだ。

だからこれからは飲みたいときに飲み、食べたい時に食べ、朝起きるのが辛い時なんかも歯を食いしばって二度寝をして行こうと思う。

だがこれには二点ばかり大きな問題がある。

まず、あんまり一生懸命をしすぎるとバイト先で怒られたりして酷い苦痛を味わう事になり、結果的に未来の子供たちからその分の苦痛を奪ってしまう形になってしまうのと、あと一つは、そもそもこの話が「もし、人類全体で痛みの総量が決まっていたら」というありえない仮定にたっている事だ。

ありえない仮定にたった話というのは、つまりそもそもがありえない話なので、私がどんなに二度寝をしても未来の子供たちの生活はなんら変わりが無いのである。

私はなんと無力な人間であろうか・・・だがしかし、なんとか頑張って生きているのだよ。今までも、これからも。

未来を担うあなた達へ

素肌に革ジャンを着たら蒸れる。きっと蒸れる。それはあなたが生きているという証なんだよ。だから大事にして欲しい。命を。そして革ジャンを。

今、私達は物質的には豊かな生活を送っています。でも考えて欲しいんです。私達は豊かさを求めるあまり、大事なものを失ってませんか？たとえば保証書です。保証書が無いと、テレビが壊れた時どうするのです？あとリモコンとか。ずっとテレビ東京しか見れない生活、我慢できますか？

これから先の時代を生きるあなた達へ、私達が一体何を残せたのか分かりませんが、でもこれだけは聞いて欲しい。女子は、素肌の上にピチットしたライダースーツを着用するのはどうでしょう。男子は草でも食ってなさいよ。女子のその姿だけで、何人の人を幸せに出来るか考えた事ありますか？あったら病院に行ったほうがいいですが、全世界中の女子が素肌の上にピチットしたライダースーツ姿だったら、きっと戦争はなくなるでしょう。オギオギした状態で戦争なんて出来ませんからね。

あと、そうですね、私達が今のあなた達くらいの頃には、日本にはまだ「ブルマ」という素晴らしい文化が残っていました。いや、ブルマ単体が素晴らしいのではなく、ブルマを恥じらい体操着を下におろす仕草、その仕草がなんとも言えずメモリアスなわけですね。男子は逆剥けでも剥いてなさいよ。その仕草一つで、救える命もあるかも知れないって、思いませんか？

私が言いたいのは一つです。相手をもっと思いやろうという事です。たとえば何かイタズラされたとしましょう。(イタズラと聞いて卑猥なものを想像した人は帰っていいです)それに対して罵倒を浴びせるではなく

「もう～石橋さん、メっ！」

って言ってくれさえすれば、私は頑張れるのですよ。

女子に限った話ですけどね。

男子は財布を小銭でパンパンにさせてなさいよ。